

日本文学の影響からみた 1980 年代の日中関係*

岩 崎 真 結

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

日本と中国は、多くの問題を抱えており、特に近年の日中関係はかつてないほどに冷え込んでいる。日本の言論 NPO と中国の国際出版集団が 2005 年以降毎年実施している共同世論調査¹⁾(2015)によると、相手国に対する印象について、中国に対して良くない印象を持つ日本人は 88.8%にのぼり、最も悪かった昨年と比べると改善はみられるが依然として高水準だった。一方、日本に良くない印象を持つ中国人は 78.3%で、数年来の結果と比較すると改善がみられたものの、全体としては良くない印象を持つ中国国民が多い。このように現代の日中関係は深刻な状態が継続しているが、かつては日中友好の時代があった。米中接近の翌年、田中角栄首相は訪中し、日本は戦後断絶していた中国との国交を回復した。さらに 1978 年には日中平和友好条約を締結し、「日中友好ムード」はますます加速した。1970 年代の日中関係は、なぜこれほど良好だったのか。日中平和友好条約にも明文化されている、文化面での交流が重要な理由の一つであったと考えられる。

文化大革命が終わると、それまで文化的に鎖国状態だった中国に、突然海外文化が流入するようになった。たとえば、1979 年には松本清張の『点と線』が、外国文学作品として初めて中国語に翻訳され出版された。同年には西村寿行原作『君よ憤怒の河を渉れ』が、外国映画として初めて中国の映画館で上映され、高い評価を得た。こうした日本文学への接触は、日本という国への興味を掻き立てただろう。文化交流こそ日中友好の土台だったと考えるならば、70 年代以降に日本文学作品がどのように翻訳され人々の関心を集めたかを探ることに、現在深刻化する日中関係を改善の方向へと向かわせるヒントが隠されているかもしれない。

* 社会科学総合学院劉傑教授の指導の下に作成された。

また興味深い調査として、韓国外交部が民間企業に委託し 2015 年に実施した日中韓 3 か国の相互意識調査²⁾によると、中国に好感を持つ日本国民はわずか 5.8%だが、日本に好感を持つ中国国民は 35.3%という結果が出た。この結果にも、文化交流が関連しているのではないだろうか。数年来の日中間文化交流を振り返ると、日本政府のクールジャパン戦略により、アニメや漫画などの現代日本文化は海外へ積極的に発信された。文学を例にとると、中国では日本文学コーナーを設ける書店が多く、日本文学への関心も 70 年代以降脈々と続いている。その一方、日本の書店での中国文学の取り扱い是非常に少なく、中国文学作品を手にする機会はあまりないのが現状である。日本に好感を持つ中国人が増加している理由として、日本文化の影響は大きいのではないか。数十年間にわたり脈々と続く日本文学への関心を、その発端にさかのぼって考えることは、日中文化交流史を明らかにすることになり、日中友好の根源を究明する意義がある。国家間の友好関係構築における文化交流の重要性をふまえ、本論文では中国国内での日本文学の翻訳状況を調査する。中国語に翻訳された日本文学作品を通して、当時の対日意識や日中友好において文化交流が果たした役割を解明する。

1-2. 論文の構成

本論文では、改革開放以後の中国国内における日本文学作品の翻訳状況に検討を加える。その準備として、中国でどのような文学作品が好まれていたのかを明らかにし、中国文学の潮流を理解する。改革開放以後の中国は、文化にも独自の発展がみられ、文化大革命により制限を受けていた文化がようやく解放されることにより、自由な創作活動が許されるようになった。つまりこの時期は、現代中国文化が最も花開いた時期であると考えられる。しかし、1989 年天安門事件により、中国文化の発展は停滞することとなる。よって、本論文は 1979 年の改革開放から 1989 年の天安門事件発生までに焦点を当て、その 10 年間の中国での日本文学の動向を探ることとする。

2. 新時期文学

中国においては、文学は政治と密接に関わるものだった。抗日戦争下の 1942 年、毛沢東は延安にて講話を行った。この延安の文芸座談会における講話は、抗日戦争勝利に向けて、一致団結して立ち向かうため、知識人の思想を統一することが目的だった。講話を発表することによって、毛沢東は文芸界にも政治の力を拡大させようと図ったのである。毛沢東は講話の中で、“文芸・芸術とは共産党の政策を民衆に宣伝啓蒙し、民衆の要求を党に伝えるメディアである”と述べ、文芸は共産党の方針を農民たち末端まで周知させる役割を担うとした。これ以後文学作品は芸術性を追求するものではなく、政策を宣伝する機

能を持つものとされ、この講話が中華人民共和国における文学の方向を決定づけ、文学創作の原点ともなった。

1966 年に文化大革命が始まると、中国文学は暗黒期を迎える。知識人階級である作家たちの自由な意思による創作活動は許されず、自由な創作活動を行う権利は徹底的に奪われた。多くの作家は激しい批判や迫害の対象となり、幹部学校という名の収容所に送り込まれ、労働を通じた思想改造を強いられた。殺害される者や投獄される者、迫害に耐えられず自殺する者も現れ、死亡する文学者も少なくなかった。また、文学雑誌は停刊し、出版社の活動も停止された。この間も文学作品は存在するが、芸術性を追求するものではなく、階級闘争や革命といった非日常を題材とし、それらを通じて共産党は、革命の精神を全人民に浸透させようと試みた。文革期文学は、延安の文芸講話に基づく、政治的性格の強いものや、共産党の定める定型に合わせた作品が中心で、作風は一元的であった。つまり、文化大革命は中国文学界にとって大きな試練であり、文学の暗黒期・空白期といえる。

文化大革命が終わると、文学は少しずつ政治的権力から独立し始める。その契機として挙げられる代表作に、劉心武の『クラス担任』がある。当該作品は、1977 年 11 月の雑誌『人民文学』に掲載され、文革後の新しい文学の礎となった。作者の劉心武は元中学の国語教師で、教師の立場から文化大革命に問題提起している。ある日張先生のクラスにやってきた不良少年の宋宝奇を、共産主義青年団書記を務める模範生の謝恵敏が階級闘争で打倒すると言い出す。共産党の教えを絶対的に信仰する謝恵敏は、党の教え以外はすべて憎むべきものととらえ、階級闘争を通じて打倒するという考えを持っていた。一見正反対に見えるこの二人の生徒は、文化大革命によってものごとを歪んだ視点からしか捉えることができず、自分自身で判断する能力が欠如している点では全く同じである。彼らはこの時期の政治の犠牲者・被害者であると教師の立場から指摘した本作は、文学作品としての芸術性には乏しいものの社会的意義を持つ作品だったといえる。さらに、まだ間接的ではあるものの、実質的には文化大革命を否定する内容となっている。本作の最大の特徴は、まだ文化大革命を批判することの許されなかった時代に、“文革批判”という中国文学の新たな方向性を提示したという点である。

文学での文革批判を後押ししたのが、鄧小平による政治での文革批判だった。1978 年に鄧小平は党中央機関紙『人民日報』を通じて、“实事求是”キャンペーンを展開した。“实事求是”とは毛沢東の言葉で、いかなる理論も実践し検証せよという意味である。鄧小平は皮肉にも毛沢東の言葉を用いて、文化大革命時の真実を見直そうと呼びかけた。政治面でも文革否定の気運が高まる中、文学においても文革を否定する作品が人々の好評を得ていた。

1978 年 8 月、当時復旦大学在学中の盧新華は、短編小説『傷痕』を発表した。主人公

の王曉華は早くに父を亡くし、共産党員の母と上海で暮らしていた。その母も文化大革命で党の裏切り者とされ、王曉華は母との親子の縁を切り、共産党への忠誠心を表そうと自ら遼寧省に下放した。しかし、どこへ行っても裏切り者の娘とレッテルをはられ、自分の殻に閉じこもるようになってしまった。その後母は名誉を回復していたが、死に目に会うこともかなわず、主人公は文革により人間関係を崩壊させられた“傷痕”を永遠に忘れないと語る。この作品の特徴は、文革期の社会的現実を批判的に描きその悲劇を扱うことで、当時の中国社会の暗黒面を明らかにした点である。『傷痕』をきっかけに、文革によってもたらされた悲劇をテーマとする作品が多く誕生した。

なぜ新しい文学が急速に中国社会に受け容れられたのか。第一に、人々の共感を得られたことが挙げられる。文革期は思想統制が徹底され、貧しい生活に辛さを実感しながらも、自らの苦しさを口にするには許されなかった。しかし傷痕文学では、文革期に人々が味わった理不尽さを写實的に描き出し、苦しみを淡々と綴った。読者が登場人物に自らを重ね、自分自身の文革期の苦しみも回顧し、公表することで、傷痕文学は更なる広がりをもせたと考えられる。さらに、『クラス担任』や『傷痕』はそれまでの革命文学とは異なり、当時の中国社会の日常をテーマにしていた。日常生活を主題とする点は、それまでの革命や階級闘争を描く中国文学とは異なるため、読者に新鮮さを感じさせただろう。文革期の一元的な文学作品から解放された中国は、新たな文学を渴望していたのである。新しい文学への欲求は、次々と生まれる文学の新たなジャンルの受け皿となり、人々の芸術への欲求を満たしていた。

1978年12月の三中全会で鄧小平が文革を事実上否定すると、79年以降の文学作品では文革前後も批判の対象にするようになった。文革以前の建国から反右派闘争、大躍進政策にさかのぼって、文革の歴史的根源を究明しようと試みる反思文学と呼ばれる作品が多く発表された。こうした流れはより深化し、中国伝統文化さえも見直す風潮が強まった。文革期に農村に下放させられた作家たちが農村を舞台にした作品を多く描き、中国の文化の本質を作品に描き出そうとした。1985年韓少功の『文学の根』を代表とする一連の作品を尋根文学とよぶ。

このように、文革以前には政策を伝える媒体としての機能しか持たなかった文学が、政治を批判するメッセージを持つ、新しい性格を帯びたものとなった。文学が政治と切り離され、思想解放に伴う自由な創作活動が多様な作品を生み、「新時期文学」として中国独自の文学作品が人々に好まれた。さらに、鄧小平による実質的な文革否定が、傷痕文学をはじめ一連の新時期文学作品発表の追い風になったことは間違いないだろう。中国独自の文学が発展し繁栄した1980年代は、中国文学の黄金期ともいえる。

ところが、1989年の天安門事件発生により、中国国内では再び言論統制が厳しくなり、文学作品制作も制限される。天安門事件は、それまでの間によく芽吹いた中国文学の

芽を摘み取ってしまう結果になった。

3. 中国国内における日本文学

3-1. 日本文学を紹介した文学雑誌

改革開放後の新時期文学のあり方から、人々の芸術や新しいものに対する欲求を読みとることができる。人々は新しい知性を求め、新時期文学を誕生させた。しかし、人々は新時期文学に何か物足りなさを感じていた。それはある種の新鮮さへの追求でもあった。こうした新しい知性を求める社会の雰囲気合致したのが、日本文学であった。新時期文学は文化的鎖国状態にあった中国に新たな芸術をもたらしたが、作品は中国国内を舞台とし、中国からの完全な脱却は成し遂げていなかったからだ。

新たな芸術への欲求が膨らむ状況下で、1979 年に『点と線』が出版されたことや、映画『君よ憤怒の河を渉れ』が公開されたことは、中国国民にとって日本文化との衝撃的な出会いであった。日本文学は革命とは無縁の、新たな文学の形を中国社会に提示したからである。特に映像を通して見る隣国の日本人は、いまだに貧しい生活を送る中国とは対照的に現代的で豊かな生活を送っており、中国国民はその様子に憧れすら抱いたかもしれない。文革によって創出された人々の芸術への欲求不満状態という空白を、日本文学が埋め合わせた。1980 年代に起こった日本文学ブームは、このような背景によるものである。

図 1 中国国内の文学雑誌一覧

	文学雑誌	創刊年	出版元
1	世界文学	1953 年	中国社会科学院外国文学研究所
2	外国文学动态研究	1955 年	外国文学研究所 / 译林出版社
3	外国文学研究	1978 年	华中师范大学 / 华中师范大学文学院
4	译林	1979 年	译林出版社
5	当代外国文学	1980 年	南京大学外国文学研究所 / 译林出版社
6	外国文学	1980 年	北京外国语大学
7	国外文学	1981 年	北京大学
8	外国语言文学	1984 年	福建师范大学
9	外国文学评论	1987 年	中国社会科学院外国文学研究所
10	当代世界文学 (中国版)	2006 年	中国社会科学出版社
11	世界文学评论	2006 年	外国文学研究编辑部 / 长江文艺出版社
12	译林 (学术版)	2011 年	江苏译林出版社有限公司
13	比较文学与世界文学	2012 年	中国比较文学学会
14	外文研究	2013 年	河南大学

参考：CNKI 中国期刊全文数据库 http://gb.oversea.cnki.net.ez.wul.waseda.ac.jp/kns55/oldNavi/n_list.aspx?NaviID=48&Field=168%e4%b8%93%e9%a2%98%e4%bb%a3%e7%a0%81&Value=F082%3f&OrderBy=idno&Flg=local&NaviLink=%e4%b8%96%e7%95%8c%e6%96%87%e5%ad%a6 (アクセス 2015/11/29)。

では日本文学はどのようにして中国に流入したのか。国外の文学作品が流入するルートの一例として、外国文学を紹介する文学雑誌が考えられる。図1は中国国内で出版されている、外国文学に関する雑誌である。

この図から、外国文学の中国語訳や評論を紹介する14誌のうち、7誌が文革以後から天安門事件までの間に創刊されたことが分かる。1980年代の日本文学ブームと重なっており、雑誌の創刊と日本文学ブームとの相関性がうかがえる。

3-2. 中国国内における日本文学の翻訳状況調査

中国の人々はどのようなジャンルの日本文学に特に関心を持っていたのか。2006年に出版された『日本近・現代文学の中国語訳総覧』³⁾は、康東元氏が日清戦争以後から2005年までの約110年間に中国語に翻訳された日本文学作品を調査し、一覧表を作成したものである。この一覧表から1979～89年に中国語に翻訳された日本文学作品を抽出し、その10年間に中国国内で特に好評を得た日本文学のジャンルや作品を明らかにすることで、当時の対日意識や日中友好の要因を理解できるのではないか。一覧表を参考に、作者毎に10年間に翻訳された冊数を調査した。

10年間に中国語に翻訳された作家は合計162名だった。その中でも、小説集も1冊と数えて、5冊以上出版されている作家が11名、10冊以上出版されている作家が13名いた。本論文では、10冊以上出版された13名の作家に注目したい。作者名とその作品数、

図2 1979～89年における日本文学作品の中国語翻訳状況一覧

作者名	作品数	ジャンル	受賞歴
赤川次郎	11	推理小説	推理小説新人賞
石川達三	18	社会派小説	芥川賞、菊池寛賞
五木寛之	10	小説、随筆	直木賞、吉川英治文学賞
井上靖	28	歴史小説（中国）、現代小説	芥川賞、菊池寛賞
川端康成	14	小説	ノーベル文学賞、菊池寛賞
島田一男	11	推理小説	日本推理作家協会賞
夏目漱石	18	小説、評論	
西村寿行	14	社会派推理小説	オール読物新人賞佳作
星新一	10	SF、伝記	日本推理作家協会賞
松本清張	38	社会派推理小説、歴史小説	芥川賞、菊池寛賞
水上勉	16	社会派推理小説、歴史小説	菊池寛賞、直木賞
椋鳩十	15	児童文学、動物文学	赤い鳥文学賞
森村誠一	49	推理小説、時代小説、ノンフィクション	日本推理作家協会賞

参考：康東元（2006）『日本近・現代文学の中国語訳総覧』、勉誠出版。大久保典夫、吉田熙生（1982）『新版現代作家辞典』、東京堂出版。大高利夫（2002）『新訂作家・小説家人名事典』、日外アソシエーツ。

作品のジャンルと、もし受賞歴があればそれも加えて図を作成した。(図 2)

この図から、二点の特徴が読み取れる。まず一点目は、受賞歴のある作家が多い点である。これは、話題性という観点から考えれば当然だといえよう。芥川賞や菊池寛賞などの名立たる賞を受賞した著名な作品ならば、中国の出版社が注目するのは当たり前である。これについては、中国研究月報の 1980 (昭和 55) 年 12 月の第 394 号で杉山太郎氏が指摘している通り⁴⁾、日本国内の読書世論調査の結果、ベストセラーになっている作品と中国に紹介されている作品との合致からも明らかである。おそらく、読書世論調査で紹介される、議論となった本、話題となった本などの項目から、日本国内で売れている本を調査し、中国で紹介する本の指標としていたのだろう。文学賞を受賞した作品が、複数の出版社から出される場合や、受賞していない作品でも作家の評判が良いので出版する場合もあり、受賞歴のある作家の作品の出版数は必然的に多くなる。例えば毎日新聞社が毎年実施している全国読書世論調査によると、1976～84 年にかけて、77 年と 79 年を除いて「好きな著者」の第一位は松本清張である。松本清張は多くの文学賞を受賞していたが、それと同時に日本国内で最も注目されていた作家であることもうかがえる。

二点目の特徴は、推理小説が多いことである。上記 13 名の中で最も冊数の多い森村誠一と、二番目に冊数の多い松本清張は、いずれも推理小説を得意とする作家である。彼らの共通点は、単なる推理小説作家であること以外にも複数ある。推理小説は、警察もの・法廷もの・歴史ものなどの様々なジャンルに分類できるが、森村誠一と松本清張は両者とも、社会派推理小説を得意としている。社会派推理小説とは、事件とその裏にある社会背景を綿密に描き、作品全体に現実感を与える作風である。社会派推理小説は松本清張が先駆者となり、1960 年代以降日本の推理小説界の主流となった、日本独自の推理小説ジャンルである。荒正人が「過去十年間の探偵小説の流行の発端をつくったという意味で、『清張以後』という言葉が行われている」⁵⁾と指摘していることから、松本清張の推理小説における功績の大きさは明白である。森村誠一、松本清張は社会派推理小説の代表的作家であり、日本の推理小説人気を牽引した作家といえる。両者の日本国内での人気は、中国での日本文学ブームの先駆けとなった。事実、松本清張も森村誠一も改革開放後の 1979 年に本が出版され、映画が公開され、いち早く中国に作家としての存在が知られるようになった。

また、両者はほぼ同年代に活躍した作家でもある。松本清張は 1950 年代から、森村誠一は 1960 年代から活動し、次々とベストセラー作品を書き上げた。このことから、両者は日本国内でブームを巻き起こしてからあまり時間間隔をおかずに、中国へ次々と輸出されたことがわかる。以上の点から、当時の中国社会には、推理小説の中でもとりわけ社会派とよばれるジャンルへの関心が高かったことがうかがえる。この点について、次章で考察してみたい。

4. 考察

では、なぜ1980年代に中国国内で日本の推理小説が多く翻訳されたのだろうか。その理由として①推理小説というジャンルの新鮮さ、②傷痕文学との類似性、③日本という国への好奇心、という3つの論を提示したい。

4-1. 推理小説というジャンルの新鮮さ

まず①推理小説というジャンルの新鮮さについて述べる前に、推理小説という言葉に注目したい。中国で最も権威のある辞典『辞海』によると、推理小説という言葉は日本発祥だと明記されている⁶⁾。もともとは偵探小説といわれ、推理小説とほぼ同意義で用いられていた。ところが1946年の日本の国語改革で常用漢字が見直されたことによって、偵の漢字が日常使わない文字とされ廃止された。それを契機に、日本では偵探小説に代わって推理小説が一般的に使われるようになった。また、1979年に出版された『辞海』には、偵探小説という見出し語は掲載されていたが、推理小説という見出し語は確認できなかった。このことから、日本の推理小説と共に、推理小説という言葉そのものも中国に渡ったといえるだろう。日本発祥の推理小説という用語が、現在は中国でも一般に使われていることから、日本の推理小説の中国に対する先進性が読み取れる。

では中国国内には日本から伝わる前、推理小説はなかったのか。興味深いことに、中国における推理小説の歴史は意外と長く、清代には西欧から推理小説が伝わってきていた。19世紀にはすでにシャーロックホームズシリーズが中国語に翻訳され、雑誌上に掲載されていた。またこれの影響を受けた程小青は、設定を似せた霍桑シリーズを完成させ、現在では「中国推理の父」と呼ばれている。

しかし文革期の動乱の中では、探偵が登場する推理小説作品は減り、スパイと公安の戦いを描く、いわゆる公安ものが主流となっていった。このことから、いわゆる推理小説の発展は停滞し、中国独自の推理小説は日本の作品に比べて後れたのである。公安ものを主に読んでいた中国の読者にとって、科学的推理を行う日本の推理小説の推理過程にちりばめられた作者の豊富な知識と、作品全体の緻密なからくりは、それまでの中国の文学作品にはない新鮮さがあった。また、芸術欲と知識欲どちらも満たすものだった。中国の読者は、綿密な推理と論理性に新鮮さを感じ取り、推理小説は中国の人々の新たな娯楽となった。

そのうえ、中国で特に高い評価を得た松本清張も森村誠一も、社会派推理小説作家だった。社会派推理小説というジャンルは、西欧から伝わったものではなく、日本発祥の新たなジャンルである。西欧の推理小説は読んだことのある中国読者も、初めて読む社会派推理小説は新鮮だっただろう。

4-2. 傷痕文学との類似性

次に②傷痕文学との類似性についてだが、1980 年代に中国国内で流行した傷痕文学と、日本の社会派推理小説の作風の類似性に着目したい。

傷痕文学は、文革期に人々の身に起こった悲劇を主題とし、中国社会の闇を暴露する作風だった。一方、社会派推理小説は、社会性のある主題を提示し、それゆえに起こった事件から、当時の社会にたしかに存在する社会の暗黒を描く作風である。例えば、森村誠一の『人間の証明』では、戦後の米軍による占領下での出来事が事件へと発展している。松本清張の『ゼロの焦点』も同様である。特殊な環境下におかれた人々の日常に注目し、不正常な状態ゆえに発生した出来事から社会の暗黒面を描く手法は、両者の共通点といえる。傷痕文学は、人々の日常における苦しみを描くことで多くの共感を集めた。戦後日本の日常生活から、日本社会の闇や戦時中の傷痕を描く社会派推理小説は、傷痕文学を求める読者層の欲求を見事に満たしたのである。文革期の自らの苦しみを代弁してくれる傷痕文学に魅力を感じたように、特殊な状況下で闇を抱える日本の人々の存在を文学作品を通じて知ることによって、中国読者は社会派推理小説にますます興味を持つようになったと考えられる。

4-3. 日本という国への好奇心

前述の点は、③日本という国への好奇心をもたらしした。文革期にながらく鎖国状態が続いた中国では、もともと海外への興味が生まれやすい状況だった。そこに海外文化として初めて日本文化が流入した。つまり日本文化は、中国の人々が改革開放後初めて接触した海外文化であり、最も興味を持ちやすい海外文化だった。人々が日本を理解する手段の一つだったのが、日本文学である。映画やドラマなどの映像作品から、当時の日本の生活レベルの高さが読み取れた。隣国でありながら、経済発展著しく豊かな日本と、ようやく経済が開放され海外と対等な立場を手に入れたばかりの中国を比較し、その差異を感じ取った中国国民は、日本への興味関心を膨らませたに違いない。

また、言論統制の厳しい中国では、共産党の行う政策や党そのものへの批判は禁じられていた。ところが日本では、その当時の社会を批判的、風刺的に描く作品がかえって人々の賞賛を浴びていた。このような自由な表現に、中国の人々は新鮮さを感じ、社会派推理小説に魅力を感じていた。社会派推理小説で事件の背景として描かれるのは、当時の日本社会そのものであり、その作風は読者に臨場感を与えた。中国読者は、作品を通じて日本社会の現実を知りえたのである。王成 (2010)⁷⁾も、「中国读者从松本清張的『社会派推理小说』中体会到全新的艺术感受。中国的评论界看重的是『日本当代现实主义作家』松本清張，把评价的焦点集中在『社会派』这一关键词上」(中国の読者は松本清張の社会派推理小説から全く新しい芸術を感じ取った。中国の評論界は、日本当代現実主義作家松本清張

を重く捉え、評論のポイントを社会派に集中した)と指摘し、日本の現実を描く社会派に人々の関心が集まっていたことを述べている。さらに、趙徳遠 (1983)⁸⁾は、「松本清張的推理小説堪称了解日本社会的百科全书」(松本清張の推理小説は日本社会を理解する百科全書と言っても過言ではない)と指摘しており、中国の人々が松本清張の書く社会派推理小説を通じて日本を理解していたことが裏付けられる。中国の読者は、日本のことをもっと知りたいという思いから、社会派推理小説に関心を寄せていた。社会派推理小説という中国には存在しないジャンルが、中国読者にとって一種の娯楽であったのは、前述の通りである。それに加えて、社会派推理小説は日本を理解する資料としての、学術性を持ったものでもあった。読者は文学を通じて日本を知り、日本への興味を持つようになった。

5. 結論

日本文学の翻訳は、日中友好にどのような影響を与えたのだろうか。日中友好の時代と、日本文学作品が翻訳され中国で日本文学ブームが起こった時期とは明らかに合致している。このことから、日本文学は日中友好に大きな役割を果たしたと推測できよう。少なくとも文化交流と国家間の友好関係構築に、何らかの相関性は認められるのではないか。中国国内の芸術への欲求と、改革開放による海外への欲求という二大潮流に当てはまった日本文学は、中国の人々に受け容れられ、若者や知識人といった幅広い読者を獲得した。そして日本文学ブームの最大の要因は、中国の読者が日本文学に対して共感できた点である。そのことは、趙稀方 (2005)⁹⁾の森村誠一『人間の証明』を批評した論文からも読み取れる。『人間の証明』では、事件解決の最後の決め手として「人間の心」の存在を描いている。自らの地位や名誉におぼれ我が子をも手にかけて、登場人物の八杉恭子の中にもたしかに良心はあり、どんな人にも人間の心があることが証明された。文革以来、中国では階級制が強調され、人間の心は重視されてこなかった。しかし『人間の証明』で主題となった人間の心は、万人共通であり、階級を超越するものである。中国の読者は、それまで軽視されていた人間の心が誰しにも存在することに共感し、それ以後ヒューマニズムを主題とする独自の作品が多く生まれた。文革以来、感情の機微に焦点をあてる作品は中国国内にはなかった。だからこそ、日本の小説に魅力を感じ、登場人物の感情の動きに共感できたのである。

日本の作品を読むことを通して、中国の人々は日本人と触れ、日本という国への関心を深めていった。1980年代当時、日本を訪れる中国人の数は現在に比べたら格段に少なかった。日中の人々の直接的接触は少なかったが、中国の人々は文学の登場人物や舞台を通じて、日本という国を知り、日本人を知った。つまり文学作品は文化交流だけでなく、人と人との心の交流ももたらしたのである。改革開放以前の中国では、日本といえば第二次

世界大戦の敵国、侵略国の印象だった。しかし、社会派推理小説を通して見る日本は、米軍に占領された哀れな姿だった。そこに人々は新たな日本の一面をみたのである。1980年2月5日の人民日報には、『人間の証明』の映画版について批評した、「《人証》 发人深思」という文章が掲載されている。この文章によれば、『人間の証明』は、推理小説として犯人を捕まえ事件を解決する痛快な物語であることは言うまでもない。しかし、作品中で、八杉恭子がなぜ我が子を殺さなければならなかったのか、を直接語ることではない。映画を通して、犯人の苦しみから生まれた悲劇の根源は日本の社会であるということに、観客は自ずと気付かされるのである。また、戦争の傷痕に苦しんでいるのは八杉恭子だけではない。多くの日本人が、戦争によってもたらされた苦難を背負いながら生きているのである。文章は「日本人民是不可侮的」という表現で締めくくっており、日本人の苦悩にも思いを寄せようとする。『人間の証明』などの社会派推理小説を通して見る日本は、それまでのイメージとは異なる悲哀を帯びた国である。中国の読者は日本という国が持つ多面性を深く考えさせられたのである。日本文学は中国読者の心に深く刺さるものであり、日本に対する共感の日中の心の距離を近づけ、日中友好の土台となったのである。

昨今中国政府も文化交流といった、いわゆるソフトパワー強化の政策に注力し始めている。21世紀以降、中国は文化“走出去”（海外進出の意）政策を提唱し、自国の文化を海外へ積極的に発信することによって、市民レベルで中国へ好感を持つ外国人の増加に努めている。文学においても、「出版走出去」というスローガンのもと、中国出版業の国際的な事業展開を推進している。また、中国文学を外国語に翻訳する際、中国政府が資金面で援助を行う政策を実施している。冒頭で示した日中韓の相互意識調査の結果からも分かるように、文化交流が国家間友好関係構築に大きな意義を持つことは看過できない事実である。これからの時代を担う20代30代の若者は、日中友好の時代を経験していない。しかし、そうした世代の若者文化が、クールジャパン政策や文化「走出去」政策によって海外へ発信され始めている。今再び文化交流を通じて、日本と中国が距離を縮めつつある。近い将来、「第二次日中友好の時代」が到来するのではないかと、心から期待している。

注

- 1) 特定非営利活動法人言論NPO ホームページ『第11回日中共同世論調査』結果 <http://www.genron-npo.net/world/archives/6011.html> (アクセス 2015/11/28)。
- 2) 朝鮮日報ホームページ『日本は嫌韓・嫌中 中国は親韓・反日の傾向＝韓国調査』http://www.chosunonline.com/site/data/html_dir/2015/11/08/2015110800337.html (アクセス 2015/11/28)。
- 3) 康東元 (2006)『日本近・現代文学の中国語訳総覧』, 勉誠出版。(黒古一夫監修)。
- 4) 杉山太郎 (1980)「中国における日本文学の翻訳と研究」『中国研究月報』第394号: 32-44。
- 5) 荒正人 (1964)「推理小説の今後 江戸川乱歩賞によせて」『読売新聞』1964年7月15日夕刊。
- 6) 推理小説: 原名“偵探小説”。小説類別之一。1946年日本作家本木高太郎提议为加强偵探小説的逻辑推理性, 将改名为推理小説, 而文坛反应冷淡。直至日本实行文字改革, 废止“偵”字, 推理小説之

名方广为流行。日本推理小说奠基人江戸川乱歩认为，推理小说是运用推理，逐次拨开疑云迷雾，去疑解惑，描写侦破犯罪案件的过程，并以情节引人入胜。（『辞海 第六版缩印本』，上海辞书出版社，2010年4月，1910页）。

7) 王成（2010）「松本清张的推理小说与改革开放后的中国」『日语学习与研究』第149号。

8) 赵德远（1983）「日本当代现实主义作家松本清张」『日本文学』。

9) 赵稀方（2005）「“新时期”构造中的日本文学——以森村诚一和川端康成为例」『中国比较文学』第61期。

参考文献

張競他（2005）『現代中国の文化』，明石書店。

高島俊男（1981）『声無き処に驚雷を聞く』，日中出版。

遇羅錦（1986）『ある冬の童話』，現代アジア叢書。

藤井省三・大木康（1997）『新しい中国文学史 近世から現代まで』，ミネルヴァ書房。

岸陽子（2007）『中国知識人の百年 文学の視座から』，早稲田大学出版部。

康東元（2006）『日本近・現代文学の中国語訳総覧』，勉誠出版。

大久保典夫・吉田熙生（1982）『新版現代作家辞典』，東京堂出版。

大高利夫（2002）『新訂作家・小説家人名事典』，日外アソシエーツ。

松本清張（1971）『ゼロの焦点』，新潮文庫。

松本清張（1971）『点と線』，新潮文庫。

森村誠一（1976）『人間の証明』，角川書店。

西村寿行（1974）『君よ憤怒の河を渉れ』，徳間文庫。

杉山太郎（1980）「中国における日本文学の翻訳と研究」『中国研究月報』第394号。

荒正人（1964）「推理小説の今後 江戸川乱歩賞によせて」『読売新聞』1964年7月15日夕刊。

『辞海 第六版缩印本』（2010），上海辞书出版社。

『辞海』（1979），上海辞书出版社。

《人证》发人深思（1980年2月5日），人民日报。

王成（2010）「松本清张的推理小说与改革开放后的中国」，『日语学习与研究』第149号。

赵德远（1983）「日本当代现实主义作家松本清张」，『日本文学』。

赵稀方（2005）「“新时期”构造中的日本文学——以森村诚一和川端康成为例」，『中国比较文学』第61期。